

「現地を訪問して思うこと」

まずは、東北応援ツアーを企画して下さった立命館大学校友会と復興支援委員の皆様にお礼を申し上げます。特に福島県の現地の復興支援委員の皆様にはいきとどいたご配慮と印象に残る素晴らしいコースを企画・案内していただきましてありがとうございました。お天気に恵まれ、参加の校友会の人たちとの交流もあり、充実した楽しい二日間でした。

2011年3月11日に起こった東日本大震災の時は、夫の仕事の関係でスイスに住んでいました。あちらのテレビでは、特にBBCやCNNは津波の様子を一日中放映していて、あまりにも悲惨な状況が信じられず、テレビにくぎ付けになりました。すぐさま、スイス国内で被災者支援をしようとスイス在住の日本人や現地の人々が協力して、さまざまなイベント(著名な演奏家のコンサート、バザー、ジュネーブ日本人倶楽部の日本人祭りなどでの募金活動)が各地で催され支援金を集める活動が行われました。はるか遠くに住んでいても母国のために何かをしたいという熱い思いと現地の人々の日本人への思いやりが結びつき、支援活動の輪が広がっていきました。

私自身はスイス在住中には被災地に行く機会はありませんでしたが、一度はぜひ訪れ自分の目で見てみたいと思っていました。このたび日本に帰国して、送られてきた立命館大学校友会報に東北応援ツアー参加者募集があり、早速応募し、東北応援ツアーに参加させていただきました。

私たちのコースは、福島原発からの放射能で汚染され、一時は全村避難した川内村を訪れました。川内村は小さな川が流れる緑豊かな自然に恵まれた美しい農村です。しかし、この村が他の村々と異なることは、村道脇に除染で取り除かれた土が黒い袋に詰められ整然と並べられ、更地にしたようなところではブルドーザーで除染を行っている光景が見られることです。村は静かであり人を見かけることもなく、子どもの姿は見えず、空家状態の家もあり、過疎化が進んでいる感じを受けました。事実、再開されたばかりのいわなの郷での遠藤村長の話では、約65%の住民が戻ってきているが、先祖代々の土地を未来に繋ぐことができなくなったこと、農林畜産業を継続していくための意欲の減退など、生きがいやどう取り戻していくかが悩みであり、村の課題でもあること。また、戻ってきた子どもたちは、57人と震災前の25%に減少したため、クラブ活動が行えない、子ども同士の絆の分断など子どもたちの教育環境も大きな課題であると伺いました。

福島第一原発の放射能による被害は、計り知れないものを人々の普通の生活から奪ってしまいました。村に戻ってきた人、仮設住宅で暮らす人、それぞれが大変な思いをしながらの生活には、一人ひとりの事情があり、物語があるでしょう。そうした思いを私たちはどのように受け止めればいいのでしょうか。バスのなかで福島県校友会の方が言われた「見えないものをしっかりと見て帰ってください」という言葉には、目に見えない問題の深刻さと村人たちの苦悩の深さを想像するしかありません。

また、校友会のメンバーであり福島県庁の職員である飯塚氏の「忘れ去られることも被害である」という言葉は、被害はいまだに終わらず、原発で汚染された土地に住む福島県の人々の悔しさ、悲しみは癒えることもないのに、遠く離れて暮らす私たちは日常生活に埋没し、福島の人たちへの思いを忘れがちであるという姿に対する批判であり、忘れないでというメッセージなのだと思います。

こうした困難のなか、遠藤村長さんはじめ村役場の人たちや住民たちが、村の再生を願って地道に活動しておられる姿には感銘を受けました。案内していただいた完全密閉型の野菜工場 **KiMiDoRi** は、そんな村おこしのひとつだと思います。フレッシュなフリルレタス

は美味しかったですよ。

福島県校友会の馬場さんが言われた、援助ではなく、応援を。福島を元気にするために福島の素晴らしさを知って欲しい、観光客が多く訪れた震災以前の福島のように、土地の物産を買って、食べて、飲んで（日本酒の産地です）楽しんでほしいという言葉どおり、今回のツアーでは満喫できました。魅力ある福島をぜひもう一度夫と共にゆっくりと旅したいと思いました。

最後に、川内村を訪問して感じたことは、日本の経済優先のための原子力エネルギーの利用は、非常に大きなリスクを負うことであり、そのひとつの例が川内村の姿であると思いました。宿泊先のホテルでは、校友であり福島県庁の職員である飯塚氏のレクチャーで「ふくしまの復興のあゆみ」についてお話を伺いましたが、現実には除染された土壌の中間貯蔵施設への移管さえまだ先のように、本格的な復興はまだ途上であり、避難指示が解除されても若い人たちは村に戻ることをあきらめざるを得ないようです。

福島の自然豊かな村や町、山々が放射能という「見えないものの恐ろしさ」に浸食されている現実に対して、住民の声なき声をどのくらい政府や電力会社は吸い上げ、エネルギー政策に反映しているのでしょうか。今後の日本のエネルギー政策の在り方と福島の復興に無関心ではいけないと思いました。